

20年を振り返る

三重県立美術館は、昨秋20周年を迎えた。準備室時代も含め、開館当初から勤務してきた筆者にやささか懐旧の情がないわけではない。しかし、現在も進みつつある美術館をめぐる大きな変化のこと、今後の美術館のあり方をめぐる課題の方がはるかに大きな位置を筆者の中で占めている。

とはいえ、三重県立美術館の将来にわたる方向性を検討する際、20年間の活動、館長をはじめとする館員の「美術館」についての基本方針が出発点になることは間違いない。

三重県立美術館は、いうまでもなく地方自治体が直接運営する公立美術館である。しかし、前例主義、遅い意志決定、硬直化した対応等々、しばしば指摘される行政組織の短所は極力排除しようという意識を職員が開館当初から共有してきたことは、この美術館の在りようや性格に大きな影響を与えてきたと考えられる。

また、「地方」美術館という言葉があるが、「地方」の捉え方も美術館の性格と大きく関わる問題である。

三重県にあるから、三重のことのみを活動対象とするという方針を三重県立美術館は取らなかった。もちろん、古代から現代まで三重ゆかりの様々な美術を取り上げてきたが、一方で国内外の様々な美術も積極的に取り上げてきた。この地域性と普遍性双方を視野におさめた活動も、美術館の性格づけに大きく関与してきたといえるだろう。

さらに、美術館と地域社会との関係、館運営に関することで、ボランティア「櫛の会」、三重県立美術館友の会、(財)三重県立美術館協力会、(財)岡田文化財団など支援団体の存在を忘れることができない。上述した美術館の性格や雰囲気、活動のあり方もこれら団体からの支援等があって初めて可能となったといっても過言ではないだろう。

今、日本の美術館は大きな変革の波に洗われている。見通しを立て難い状況が続くと思われるが、これまでの活動で蓄積された三重の美術館の長所が今後もさらに活かされる美術館で在り続けたいと思う次第である。(Mi)



サンパウロ美術館関係者との記念写真



三重県立美術館 開館!



開館記念レセプション